# 目次


歌集解説……7
万葉集・古今和歌集・新古今和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集・金葉和歌集・千載和歌集・玉葉和歌集・山家集・金槐和歌集

一　万葉集……25
二　古今和歌集……137
古今和歌集仮名序……138
和歌……143
三　新古今和歌集……185
四　三大歌集以外の歌集……233
拾遺和歌集……234
後拾遺和歌集……238
金葉和歌集……241
千載和歌集……246
玉葉和歌集……248
山家集……250
金槐和歌集……252

付録……261
万葉集……262
古今和歌集……271
新古今和歌集……275
大学入学試験問題選……279
和歌の索引……305

参考
大和三山……29　壬申の乱……33　高橋連虫麿の伝説歌……117　序詞・掛詞・縁語……150　勅選集……158　六歌仙……180　本歌取り・体言止め・初句切れ、三句切れ……187　歌合（うたあわせ）……220




# 歌集解説

## 万葉集

(1) 書名　「万葉集」という書名のゆらいについては、諸説があるが、大別すると(一)『よろづの言の葉』を載せた集」（多くの歌を集めた集）、(二)「万代・万世にわたる集」（「葉」は「世」「時代」などの意）の二説にわけられる。これを漢籍に照らしてみると、(一)のように「葉」を「詩歌」の意に用いた例はなく、(二)の「万代・万世」の意には、はなはだ多く用いられている。したがって「万葉集」という書名を漢籍によってつけたとすれば、万世にわたって集められた集ととるべきであろう。そして、新しく誕生する歌集が万世にわたってうたい伝えられるようにとの命名者の願いと祝賀の心とがこめられていたのであろう。なお、よみ方は、今日マンヨウシュウまたはマンニョウシュウと読んでいるが、上代ではマンエフシフまたはマヌエフシフと読まれたと推定されている。

(2) 成立と撰者　「万葉集」の成立時期については、諸説があって一定しないが、集中年代の明記されている歌で最も時代の新しいのが天平宝字三年（七五九）正月の大伴家持の歌であるので、それ以後の成立と考えられている。しかし、それ以後のいつであるかについては、はっきりしない。だいたい、奈良時代の末と見る説が穏当であろう。撰者についても諸説がある。全二十巻、約四千五百首の歌、作者は天皇から農民にいたる各階層、時代は（真偽に問題はあるにしても）十六代仁徳天皇から四十七代淳仁天皇までの数百年、地域は陸奥国（東北）から筑紫国（九州）にまでまたがっているということから、ひとりの手で集中的統一的に編集されたものとは考えられない。二十巻すべてが別人の手によって編集されたとは考えられないが、少なくとも五、六人、多ければ十数人の手によって、複雑な手順を経て成立したと思われる。ただその中で、巻十七以後の四巻に家持の歌日記が収められ、大伴一族のことについての記事が

1-2　天皇、香具山に登りて望国したまふ時の御製歌　舒明天皇

大和には　群山あれど　とりよろふ　天の香具山　登り立ち　国見をすれば　国原は　煙立ち立つ
海原は　鷗立ち立つ　うまし国そ　蜻蛉島　大和の国は

〔通　釈〕この大和の国には多くの山があるが、中でも見事なこの天の香具山よ。その香具山に登り立って国見をすると、国の広い所にはあちらこちらに煙が立っている。そして水面にはそこここに水鳥が立っている。素晴しい国だなあ。この大和の国は。

〔語釈・文法〕大和（名）に（格助）は（係助）群山（名）あれ（ラ変・已）ど（接助）とりよろふ（ハ四・体）天（名）の（格助）香具山（名）登り（ラ四・用）立ち（タ四・用）国見（名）を（格助）すれ（サ変・已）ば（接助）国原（名）は（係助）煙（名）立ち（タ四・用）立つ（タ四・終）海原（名）は（係助）鷗（名）立ち（タ四・用）立つ（タ四・終）うまし（形ク・体）国（名）そ（係助）蜻蛉島（枕詞）大和（名）の（格助）国（名）は（係助）

○天皇―舒明天皇。○香具山―畝火山、耳梨山とともに大和三山の一つ。奈良県磯城郡にある。古来、神聖な山として貴ばれる。○望国（くにみ）したまふ―歌中の「国見をすれば」に対応する。「国見」は、高い所に登って国状を望み見ること。「たまふ」は天皇の動作を敬う。○大和には―「大和」は今の奈良県一帯。○群山あれど―たくさんの山々があるが。「ど」は逆接。○とりよろふ―「とり」は接頭語で「よろふ」の意味を強める。「よろふ」は「備わる」の意。ここでは天の香具山が山としての雄姿を備えている気持ちを表わす修飾語として用いられている。○天の香具山―文脈的にはこの次に「に」を補う。しかし、天の香具山に対する感動的な呼びかけの意を含んでいることも忘れてはいけない。「天の香具山よ。その香具山に」○国見をすれば―国見をしてみると。主格は作者である天皇。○国原は―国原では。「国原」は国土の広く平らなことを言う。○煙立ち立つ―煙がそこかしこに立ち昇ってくる。「煙」は人家の炊事の煙。裏に、飢えの心配がない民の生活の安定を表わしている。○海原は―水面では。「海原」は、もともと「海の広い所」を



表わすが、ここでは香具山の直ぐ近くにある埴安（はにやす）の池を言う。○鷗立ち立つ―水鳥がそこここに飛び交っている。「かまめ」は鷗のことであるというが、必ずしもそれにこだわらずに、白い水鳥を想像すればよかろう。ここまで第一段。○うまし国そ―立派な国であるよ。「うまし」は、素晴しい。「うまき国」となっていればわかりやすいが、上代の形容詞では連体形が終止形と同じ「〜し」の形で使われることがある。（例、五十八番の歌「棚無し小舟」）なお、「そ」は後の「ぞ」と同じで上代では清音であった。○大和の国は―倒置表現であり、「うまし国そ」の主格となっている。

〔技　法〕○対句。「国原は煙立ち立つ」と「海原は鷗立ち立つ」。○枕詞。「蜻蛉島」は「大和」にかかる。○倒置。第二段（末三句）は倒置法による強調用法。普通表現では「蜻蛉島大和の国はうまし国そ」。

〔解　説〕国見の時の歌である。国見は古代の行事であり、春に天皇が神としての資格で山に登り、その秋の豊作を祈念するものである。それを神聖視された天の香具山で行うのは、行事の性格に一段とふさわしいと言えよう。儀式歌であるだけに個性は感じられないが、素朴な民謡的な味を残している。「煙立ち立つ」「鷗立ち立つ」には高い所から見おろした感じがよく出ている。類型的な発想ではあるが、第一段では天の香具山から見た下界の様子を誉め言葉で述べ、第二段ではその大和の国の素晴しさのとこしえに続くことを祈っている。結句の倒置表現が安定感を与える。

〔作　者〕ジョメイテンノウ。第三十四代天皇。天智天皇及び天武天皇の父。万集集中の確実とされる中での最古の歌人。

〔設　問〕○大和三山を記せ。　○全体を二段に分けよ。　○倒置法の部分を指摘せよ。

**大和三山**―大和平野を訪れた人は、平野の中ほどに、三角形に配置された、浮かぶ舟にも似た三山に感銘を受ける。もっとも高いのは畝火山（一九九米）で橿原神宮の後方にうずくまる。頂上に畝火山口神社があったが今は登山は禁止されている。その東方にある香具山（一四八米）は多武峯（とうのみね）を後に控えてあまり目立たない。赤埴（赤土）が多く山容は変化を被っている。天上にあった山が地上に落ちてきたと信じられていて、古くから斎場があった。香具山の北にある耳梨山（一四〇米）はもっとも低いが、土を盛り上げた形の山容は三山の中で一番美しい。大和三山として古くから愛された。